

大川がはんらんするたびに、幕内まくのうちでは、田畑たはたや家が流され、ひどいときには、おぼれて死ぬ人さえありました。

吉十郎きちじゅうろうは、老人たちから、洪水こうずいの話をよく聞かされました。特に、あの「白ひげの水」については、よほど恐しかったのか、何回も聞かされました。

へある年、白いひげをはやした老人が、村から村へまわりながら「来年は大洪水になるぞ。大水おおみず、大水おおみず、大洪水だいこうずい。」ときけんでいたのさ。次の年になったら、本当に大洪水になつてな、会津は一面、沼ぬまみたひになつたんだ。逃げまわる人々が、川の方をみると、あの白いひげの老人が、丸木舟まるきぶねに乗つて、川かわ下しもの方に、くだつていくのが見えたのさ。〽

文禄五年ぶんろくごねん（一五三六年）の白ひげの水につづいて、太郎水たろうみず、吉十郎の二歳のときには、次郎水じろうみず、五歳のときの三郎水さぶろうみずと、幕内は、いつも、大川のはんらんによる水の害がいをうけてきたのでした。